

KUTの国際交流とグローバル化戦略

先川 信一郎*

(受領日：2015年5月7日)

高知工科大学 国際交流センター
〒782-8502 高知県香美市土佐山田町宮ノ口185

* E-mail: sakikawa.shinichiro@kochi-tech.ac.jp

要約：高知工科大学は、「大学のあるべき姿を常に追求し、世界一流の大学を目指す」という理念を掲げ、「はっきりと違いのある大学」「人が育つ大学」として、存在感を示してきました。学術分野を軸とする国際交流は、本学のグローバル化の柱であり、2003年に創設された博士後期課程特待生制度（SSP）は、優秀な学生を世界中から募集・選抜して先進的な研究を進め、レベルアップに貢献してきました。また、海外の提携校との研究交流や交換留学をはじめ、フロンティアテクノロジーシンポジウム（ISFT）、社会マネジメントシステム学会（SSMS）、安徽大学とのシンポジウムの開催、タイ・シンガポール研修、海外インターンシップ、YOSAKOIサマースクール、ジョン万次郎プログラム、インターナショナル・ハウスも、本学の交流を特徴付けています。さらに発展を続けるために、国際交流センター（IRC）は①研究②教育③地域貢献④キャンパスのグローバル化について、4つのグローバル化戦略の基本方針を策定しました。

1. はじめに

普段、私たちは「国際化」（Internationalization）と「グローバル化」（Globalization）という言葉をよく使いますが、そこには違いがあります。

「国際化」とは、文字通り「inter」と「national」の組み合わせで、国同士が相互に交流すること、国と国との関係を中心に世界を見る発想や視点、現象、動きと言えます。

これに対し、「グローバル化」は国境を無くしてしまい、地球（Globe）単位で世界全体を見る発想や視点、現象、動きです。

つまり、「グローバル化」はある意味で「国際化」の進化した形ともいえ、国境、国籍を意識せず、人類共通の価値観に基づく考えがベースとなります。

「国際化」は水平概念、「グローバル化」は立体概念と、とらえてもいいでしょう。中国語の「全球化」は、グローバル化をうまく表しています。

国際交流センターは、関係部局の協力を得て「グローバル化はなぜ必要か」という問いかけから、議論を進めました。

2. 4つのグローバル化戦略

2.1 研究による国際的プレゼンスの向上

「大学は、日本だけでなく世界に貢献することが使命である。そのために世界の一流にならなければならない。世界に貢献するために具体的に何をするかというのが、教育、研究、社会貢献のカテゴリーである」（磯部雅彦学長）。これが、グローバル化を目指す原点だと言えます。

国際交流センター会議では、教育センター、共通教育、研究本部などの担当教職員を交えて協議し、本学の国際的プレゼンスを高める方法を整理してみました。

まず戦術として、研究者の個人的ネットワークを構築、活用し①国際的に評価される研究を教員が行う②レベルの高い大学などに所属する研究者とのつながりを構築する③これらのネットワークを活用し、本学の研究者のもとで研究を行いたいという優秀な学生（とくにSSP生）を獲得する④優秀な学生の活躍により、研究をさらに発展させる—という好循環を生み出すことが必要との認識で一致しました。

世界トップレベルの研究分野を育成するには、研究者の海外派遣や海外からの受け入れ、双方向の研究交流を活性化させることが不可欠です。サバティカル・クォータの実効化と、外国人研究者が訪問した際の長期の宿泊先などの支援体制を整えることも大切でしょう。

トップレベルを目指し、研究のプレゼンスを高めるには、英語での発表論文を増やすことが最優先事項です。論文の引用数が多くなれば、学術的な価値が認められ、レベルアップにつながるからです。

本学では、教員評価における研究業績と SSP 学生受け入れ枠の算定などで、国際的評価の高いジャーナルへの投稿を高く評価しています。

それには、若手研究者の英語力アップを図るのはもちろんですが、SSP 生を効果的に活用し、論文の質を向上させたり、コースワークでは専門分野だけに埋没せず、学際的 (Interdisciplinary) に配慮した、研究者としてのベースを培う科目を導入したりすることも効果的でしょう。

世界レベルの著名な研究者が来学する機会を増やすため、本学教員が主体的に関わる社会マネジメントシステム学会 (SSMS) やフロンティアテクノロジーシンポジウム (ISFT)、安徽大学との共同シンポジウムの開催へのサポートも充実させたいところです。

このほか、英語版ホームページを拡充し、国際的な発信力を強化することが課題となっています。海外からの留学生たちは、口コミや大学からの紹介、本学 OB や教授の推薦で SSP に申請するケースが多いようです。ネット上で本学の研究内容を紹介するコンテンツが詳しくわかれば、申請者はさらに増えることが期待されます。

ただ、国際関連の業務が加速度的に拡大する中で、本学のグローバル化を国際交流センターだけで進めるには無理があります。大学の各機能が、同時並行的にグローバル化を推進できるよう目標を設定し、相互協力しながら同一方向に歩むことが理想的な形です。

2.2 国際交流プログラムの充実

海外から留学生を受け入れ、英語で提供する科目を集中させるには、第2クォータを国際ナショナル・クォータと位置付ければ、交換留学の枠はぐんと広がります。これまでは、海外の大学と MOU (Memorandum of Understanding) を締結して交換留学に持ち込もうとしても、本学に英語で提供できるプログラムが少ないことが壁になっていました。

今回、経済・マネジメント学群が米ミズーリ大学セントルイス校と提携し、同大のサマープログラムにマネジメントの学生 10 人を派遣。さらに米国人留学生向けに英語のプログラムを作ったことは、大きな進展でした。このやり方に習い、ウェスタン・シドニー大学、ジュネーブ・ビジネススクールとの MOU も早期に実現したいと思っています。

経済・マネジメント学群だけでなく、工学系の学群でも英語で提供できる専門科目をつくれば、学部・修士レベルの短期留学生の受け入れが可能になります。優秀な SSP 生の受け入れがもちろん最優先ですが、学部や修士での交換留学も一步一步拡大していく方針です。

同時に、学部生が入学直後から英語を学習するモチベーションを高めるような工夫と、日常的に英語に触れられる仕掛けづくりが必要です。これまで、タイ・シンガポール研修をはじめ、海外インターンシップ、YOSAKOI サマースクール、インターナショナルハウスでの中国の旧正月のお祝い、タイの水かけ祭り (ソンクラン)、留学生とのランチアワーなどを通じ、多様な海外体験、国際交流体験の場を提供してきましたが、今後も学生たちが、英語は使えば使うほど上達するといった自信を持てるような機会を積極的に増やしていきたいと考えています。

しかし、英語ができる学生を増やせばいいというものではありません。グローバル化の本質は、教育にあります。日本人としての教養や世界を俯瞰する視点があってこそ、自らの主張を伝えたり、日本のことについて語ったりすることが可能となります。

これらの能力を磨く一助として、本学では国際的な視野を養う教養科目として、「日本人の教養」「現代社会と国際関係論」「日本発展史」などを履修することができます。

学生のトップ層を育てるとともに、ボトムアップも必要です。多彩な国際交流活動に加え、現在は、1年生全員が TOEIC を受けることで英語力の底上げを狙っています。正課外では、TOEIC スコアアップ講座やネットを利用した学習システム ALC Net Academy、異文化交流ができるイングリッシュ・カフェに参加することを奨励しています。学生たちが努力し、卒業時には全学生が TOEIC450 点をクリアしてほしいものです。

そうした中で、英語力、コミュニケーション能力、異文化理解力の向上を目指す「ジョン万次郎プログラム」は、ユニークな試みです。指定英語科目や国際交流プログラムへの参加、TOEIC スコア、英語スピーチコンテストなどへの参加で、次々とポイント

がたまる仕組みです。修了した学生のうちさらに多くのポイントをためた学生は、高度な英語力とグローバル社会に必要な能力を獲得した学生代表として、KUT Youth Ambassadorに任命されます。これは名誉称号ですが、「大使」として、海外の協定校との国際交流などのイベントに参加することができます。当面は、各学年50人がプログラムを修了し、5人がYouth Ambassadorになることを目標にしています。

このほか、ハルビン工程大学の「第6回国際大学生雪像大会」に今年1月、本学から4人の学生が初参加して「高知城」を制作。11カ国・地域から61チームが芸術性を競った様子は、新華網や地元テレビでも伝えられました。中国の大学の雰囲気を知る良い機会ですから、今後も学生たちの参加を促す予定です。

2.3 地域のグローバル化への貢献

これまで本学への留学生は、土佐山田祭りや大学祭でタイや中華料理の店を出すなど、地域貢献を続けてきました。物部川沿いの清掃にも参加し、地元の人たちと交流してきました。ただ、SSP生は研究が忙しいため、時間的な配慮が必要であることは言うまでもありません。

その一方で、インターナショナルハウスが建設され、ここが地域交流の拠点となる条件が整いました。中国の旧正月のパーティーやタイの水かけ祭り、留学生の歓送迎会などに活用されています。香美市の姉妹都市である米フロリダ州のラーゴ市との友好提携45周年記念セレモニーも行われました。

香美市や南国市の国際交流協会と連携するなど、地域の人たちのサポートを得ながら、本学のグローバル化が地域のグローバル化につながる工夫が必要です。YOSAKOIサマースクールなどの国際交流イベントには、地域の高校、中学生が参加できるようなプログラムを設ける予定です。地元の土佐山田の高校生たちが、本学に早くから親しみ、ぜひここで学びたいと思えるような環境づくりを心掛けていきます。

ただ、香美キャンパスの周りが、開学18年がたつのに相変わらず閑散としているのは、学生たちにとって不便かもしれません。もちろん、大自然に囲まれた静かな環境は、教育と研究には最適という声もあります。韓国の嶺南(ヨンナム)大学校を訪問した際、キャンパス周辺の喫茶店やレストラン、本屋、コンビニ、商店が学生たちでにぎわい、街全体に若い活気があるのに驚きました。カルチャーラ

タンのような構想を地域とともに考える時期かもしれません。

2.4 キャンパスのグローバル化

グローバル化によって海外からの留学生が増えつつあるため、その環境整備を急ぐ必要があります。まず、本学のポータルサイトの英語対応、発信情報のバイリンガル化が求められています。国内のほとんどの主要大学には、英語、中国語、韓国語のポータルサイトがあります。

今後作成するキャンパス内の看板類は、全て英語併記を原則とし、訪問者がWi-Fiを利用できるようにするべきでしょう。永国寺キャンパスについては、外国人研究者の宿泊施設がほしいところです。

さらに、イスラム圏からの留学生や研究者が増えていることから、宗教上のニーズにも配慮することが大切です。礼拝室とハラールフードの導入には、学生たちから要請があります。幸いインターナショナルハウスには礼拝室を設けたので、学生たちがよく利用しています。

次のステップは、高知大学のように、ハラールフードを食堂で注文できるようにすることですが、まな板やフライパンまで別にして「ハラール」の認定を受けるには、いろいろな手続きに少し時間がかかるかもしれません。

異文化交流の拠点として建てられたインターナショナルハウスには、日本人学生と留学生と一緒に住んでいます。しかし、現在はラウンジが交流にあまり活用されていないため、学生たちが自主的に組織をつくり、意見を出し合って、運営してほしいと願っています。それには、運営アドバイザーのような国際経験が豊かなスタッフの常駐が望まれます。

このほか、教職員の採用において「グローバル化への貢献」をひとつの判断基準にすれば、キャンパスは変わっていくのではないのでしょうか。

3. 本学の国際交流の現状

3.1 タイ・シンガポール研修

次に本学のグローバル化の一環である2014年度タイ・シンガポール研修について報告します。学内で選抜された学生16人(男子10人、女子6人=院生1人、3年生4人、2年生7人、1年生4人)が、2015年3月1日から10日まで、タイの3大学と交流し、シンガポールの研究施設や企業を訪問しました。アジア地域への海外研修は3年連続です。異文化に触れて国際的な見識を深め、勉学に対するモチベーションや英語によるコミュニケーション力を高



泰日工業大学では、電子回路の研究室を訪問し意見交換した

めるのが目的です。

学生たちは、35度近い猛暑にもかかわらず、泰日工業大学（TNI）やチュラロンコン大学、キングモンクット工科大学トンプリ校（KMUTT）との交流や講義、キャンパス・ツアーを通じ、英語でコミュニケーションを図るよう各自が努力していました。

TNIでは、タイ・ボクシングや伝統音楽、ダンスをタイの学生とともに練習し、舞台上で披露しました。タイの民族衣装は日本人学生にもとてもよく似合い、喝采を浴びていました。さらにKUT生が発表した日本文化やKUTのプレゼン、「YOSAKOI」「折り紙」も好評でした。

チュラロンコン大学では、北大に留学経験のあるDr. Withit氏による「ASEAN Economic Community」の特別講義を受けました。ASEAN加盟10カ国が、どのように連携をとりながら、経済、教育、物流、情報などを拡大させていくかといった内容で、一つの経済圏として発展を目指すASEAN諸国の勢いは、刺激的だったようです。

企業訪問では、アユタヤにあるシチズンホールディングス株式会社の海外グループであるロイヤル・タイム・シティ株式会社を見学しました。

研修の中では、バンコクの西110キロにあるカンチャナブリへの一泊旅行は、印象深いものでした。そこは、ミャンマー国境の「戦場にかける橋」の映画の舞台にもなった第二次大戦の戦跡地です。

カンチャナブリのバンガローには、KUTやKMUTT生、芝浦工業大学生（40人）、インドネシアからの学生（2人）を含めて120人が集まり、競うように文化発表を行ったことで、予想以上に盛り上がりました。

芝浦工大は、国際PBL（Project-Based Learning＝課



あてやかなタイの民族衣装で伝統舞踊を楽しむKUT生たち

題解決型学習)に力を入れており、同大生とKMUTT生各3人がチームを組み、農村の生活や環境問題を調査し、さらに学生同士で議論を重ねた上で、英語でプレゼンを行っていました。

PBLは、与えられた課題を制限された条件下で取り組むことで、課題解決力や創造性など、学生の多様な能力を引き出すことを目的とする学習方法です。

分野や文化が異なる学生同士が協力して課題を解決するとともに、語学力やコミュニケーション能力の向上を図り、将来国際的な共同作業や研究を行う素地を養うことを目指しています。これは、今後の研修旅行のプログラムとして、参考にする予定です。

この後、学生たちはシンガポールを訪れ、同国が未来志向の国家戦略を持ち、人材、研究、金融、観光面で、ASEAN諸国のハブとして躍進している様子を体感しました。

シンガポール科学技術研究所（A*STAR）では、高知出身の井上雅文氏（臨床分子診断技術開発室リーダー）が「研究とは世のため、人のためにするもの」と話し、実験の失敗は大切にすべきで、それを解釈し評価するところから独創性、発見が生まれると強調。学生たちは感銘を受けていました。

Fusion Worldの科学技術未来館では、企業との共同試作品の次世代のアプリ、脳波によるゲーム、医学への応用機器などを見学しました。また、株式会社技研製作所を訪れた7人の学生は、同社が独自の土木施工技術を持ち、積極的にアジア展開をしている様子に興味深く耳を傾けていました。

学生たちは、国際的な視野を広げ、自分の目的を見出し、コミュニケーションのスキルに自信を持つ



この町で初めて土佐和紙の紙すき体験をする海外の学生たち

など、研修旅行の前と後では、随分と変わったのではないのでしょうか。

3.2 YOSAKOI サマースクール

サマースクールは、世界各地の提携大学と本学との友好的なつながりを維持するイベントとして、大きな効果を挙げています。「YOSAKOI サマースクール」は昨年度で3回目。2014年8月3日～12日に行われました。今回は、独立行政法人科学技術振興機構の平成26年度「日本・アジア青少年サイエンス交流事業（さくらサイエンスプラン）」の支援を受けての実施です。

国立木浦海洋大学（韓国）、安徽大学（中国）、キング・モンクット工科大学トンブリ校（タイ）、バンドン工科大学（インドネシア）、カンボジア工科大学（カンボジア）、ミズーリ大学セントルイス校（米国）、ウェスタン・シドニー大学（オーストラリア）から各2名の学生が高知を訪れ、バディの本学の学生22名とともに授業、文化交流、研修旅行、よさこい祭りに参加して交流を深めました。

台風の影響で晴天の日がほとんどありませんでしたが、メインイベントのよさこい祭りは予定通り行われ、南国土佐ならではの踊りの熱気とエネルギーに、学生たちは大喜びでした。海外からの学生は、観客やほかの踊り子ともコミュニケーションを取り、一体となって祭りを盛り上げていました。

日本人学生の中には、最初は言葉の壁があり、思うようにコミュニケーションが取れない人もいましたが、最終日には、空港で涙を流しながら別れを惜しんでいました。

今年の夏も8月3日から12日まで、中国の昆明理工大学、韓国の慶南科学技術大学、台湾の国立虎



メインステージでも元気いっぱいによさこいを披露した

尾科技大学管理学院、タイのチュラロンコン大学、ミャンマーのヤンゴン大学、モンゴルのモンゴル科技大学、スリランカのコトワラ大学から各2名、合計14人を招き、本学の学生たちと交流する予定です。同様に、台湾やタイ、シンガポールなどで行われる海外のサマースクールにも、本学から学生たちを積極的に派遣したいと思っています。

3.3 シンポジウムと学会

海外で開催されるシンポジウムや学会は、国際交流の要です。昨年、高知県と安徽省の友好提携20周年記念式典に合わせ、昨年11月15、16の両日、安徽大学（合肥市）で、同省の5大学（安徽大学、安徽理工大学、安徽建築大学、安徽農業大学、合肥工業大学）と、本学の学術シンポジウム「China-Japan Innovation Forum on New Energy Utilization and Sustainable Development（中日新能源利用与持続発展創新論壇）」が開かれました。

シンポジウムには、本学から佐久間健人（前）学長をはじめ教職員、留学生ら29人、中国側から約80人が参加。開会式では、安徽大学の程桦（Cheng Hua）学長、岩城孝章高知県副知事、佐久間（前）学長が、友好提携の歴史を振り返りつつ、さらなる学術分野での交流や相互の発展を誓い合いました。

この後、「計算機、情報」「電子、物理、材料」「資源環境、生物医薬、化学」「社会学、管理学、経済学」の4分野で研究発表が行われ、「社会学、管理学」では、本学のSSP生が、コンクリート構造の耐久性に関する考察やバイオマス発電について成果を報告。経済・マネジメント学群の渡邊法美教授が、物部川と地域創生プロジェクトについて解説しました。



安徽大学のシンポジウムでは、活発な意見交換が行われた

一方、中国の学生は、「石炭火力発電所から排出される硫黄酸化物や窒素酸化物について、経済的利益と環境保持、法的規制が必要」との見方を示すなど、地域の発展と環境に配慮した研究内容を紹介しました。

安徽大学は「国家211プロジェクト」の重点総合大学で、本学とは2012年10月に協定を締結しています。省都・合肥市は、中国を東西、南北に区切った接点にあり、この一帯は「山水人文」の地といわれるそうです。

「山」は黄山、「水」は翡翠湖、「人」は三国志の英雄・曹操、「文」は平原から起こった長江の南の徽州文化を指します。この雄大さには感心しました。

同大とは①学術フォーラムを定期的で開催する②SSPの申請と広報③教授間の研究交流④サマースクールの派遣で合意。今年は10月末に本学で学術フォーラムが開かれる運びです。

また、これに先立ち、本学同窓会中国支部が主催するフロンティアテクノロジーシンポジウム (ISFT) が、7月24日～27日に昆明理工大学で開かれることが決まっています。本学のSSP生や、各国のSSP卒業生が多数参加する予定です。

本学発の国際学会である社会マネジメントシステム学会 (SSMS) は、10月26日から28日まで、インドネシアのバンドン工科大学で国際シンポジウムを開催します。同大の計画学部 (Department of Planning) が運営する「Plano Cosmo」と共催で、記念すべき10回目となる今回は“Resilient Region Resilient City”がテーマです。

SSMSは、社会的視点と工学的視点の双方を生かした社会の経営システムの構築・運営を支援する新たな学問体系の創出を目的としており、さらなる発展が期待されます。

4. グローバル化と世界の潮流

今年3月、北京の国際会議場で開かれたアジア太平洋地域の国際教育団体 APAIE (Asia Pacific Association for International Education) の年次大会に参加した時のことです。世界から約300大学、1200人が集まり、大学の特色やカリキュラム、留学生の受け入れ態勢について、ブースを周りながら情報交換しました。そこでは、研究と教育はボーダレスであり、各大学が生き残りをかけてグローバル化を進めていることを実感しました。

大会の分科会では「Moocの国際化への効用」「中国の大学の研究における国際化」「EUとASEANのコラボレーション」「アジアのデジタル世代」「香港の大学における国際化への評価」「次の高等教育の目標はなにか」「米中の研究協力のモデルを探る」「明日のグローバルビジョンを持つリーダーを育てる」「大学の国際化をビジネスとしてどうとらえるか」「国際協力を研究目標とどう合致させるか」などの興味深いテーマが話し合われました。

最近注目を集めている「Mooc」(Massive Open Online Course) については、いろいろな大学が活用を検討しています。学生にとっては選択科目が増え、国境を越えたバーチャルな大学として機能するわけですから、講義のあり方も変わらざるを得ないでしょう。

ただ、この分野では欧米の大学が主導権を握っており、中国がそれに続き、日本ははるかに水を掛けられています。例えば、Courseraは世界の1050万人の学生が889のコースを受講。edXは300万人が473のコース、Udacityは150万人が242のコース、Miriadaxは100万人が138コース、FutureLearnは80万人が129のコースを受けています。

Moocを提供している大学は、上から順にスタンフォード大学 (99コース)、ハーバード大学 (65)、北京大学 (56)、MIT (55)、ジョージア工科大 (45)、ペンシルベニア大学 (40)、ライス大学 (40)、カリフォルニア大学バークレイ校 (39) などで、中国では北京大学のほかには清華大学、上海交通大学、香港大学、台湾国立大学、日本では東大、京大、韓国はソウル大学、延世大学が、コースを公開しています。

中国では、欧米に留学する中国人学生が増え続けている半面、留学を終えて帰国した彼らの行き場が狭まっていることや、留学生がそのまま欧米にとどまり、人材が流失していることが問題になっていました。

国際化では出遅れた感のあるロシアにも、変化がみられました。ロシア政府の調べでは、中国の R & D の 30% が留学経験者であることから、ロシアは中国を見習い、今年には 1500 人の優秀な学生を世界のトップクラスの大学に国費で留学させる方針です。

オーストラリアは「新コロポ計画」を打ち出して、インド太平洋地域で学ぶ学生の留学やインターンシップの機会を積極的に支援し、オーストラリアとインド太平洋地域の間で双方向の交流を目指しています。2015 年は、オーストラリアの 37 大学から 3000 人以上がインド太平洋地域に留学し、就業体験なども行うことにしています。これらはオーストラリアが地域全体の経済成長を推進するための戦略の一環であり、同国は 5 年間で 1 億豪ドルを拠出することを明らかにしています。

カナダ大使館は、日本人学生のカナダ留学を積極的に後押ししています。インドネシアはダブルディグリープログラムの導入やサマーコース、交換学生の制度の拡充、英語による講義を増やしていました。韓国の Ulsan National Institute of Science and Technology (蔚山ウルサン科学技術大学) は、TOEIC で 850 点以上を取らなければ卒業できないという厳しいルールを設けています。まずは本学のグローバル化を進める上で、Mooc の導入は検討すべき課題だと感じています。

5. おわりに

米国主導の大学経営と教育方式が、グローバルスタンダードとして世界を席卷し始めたのは、ソ連が崩壊し、新市場主義が台頭して、やがて世界が多極化に向かった時期と重なります。9・11 後、イラク戦争で失敗した米国は、世界の警察官であることから手を引き、緩やかな衰退に向かっていように見えます。それでも軍事力や経済力、さらに研究・教育分野は、世界のトップランナーです。とくに研究・教育分野の財政力は桁違いで、人材と資本を集中する合理的な米国方式は、各国の大学や研究機関のモデルになってきました。

経済協力開発機構 (OECD) 加盟国における GDP に対する教育支出を比較すると、日本は初等教育から高等教育まで、最低レベルの支出が続いています。長い政治の混乱や景気の低迷で、産業界だけでなく、教育界もいつの間にかグローバル化の波に乗り遅れました。中国や韓国、東南アジアの大学のグローバル化のスピードは、驚くばかりです。米国への留学生の数を見ると、日本は中国の 1 割以下、

インド、韓国、サウジアラビアにも及びません。

国際的な競争力の低下に危機感を強めた安倍晋三政権と文部科学省は、遅ればせながら「スーパーグローバル大学創生支援」(SGU) を打ち出し、昨年、全国から 37 の大学を選抜して大学のグローバル化のテコ入れに乗りだしました。

「世界ランキングトップ 100 を目指す力のある大学」(タイプ A) に旧帝大や早慶など 13 校、「社会のグローバル化をけん引する大学」(タイプ B) に千葉大や東京外語大、上智大、金沢大、東京芸大、明治大、立命館大など英語力の高い 24 校を選定し、2023 年度までの 10 年間に 1 大学当たり、最高 4 億 2 千万円の補助金を毎年支給する予定です。

例えば、芝浦工大は 2023 年までに在學生に占める留学生の比率を 1.5% から 29.4% に、留学経験のある学生比率を 1.7% から 100% に。外国語授業の比率を 3.4% から 46.4% に引き上げるという大胆な目標を掲げています。

しかし、予算と政策があっても、学生や教職員の意識改革やカリキュラムの改正、新しい英語プログラムの創設、増加する海外からの留学生への対応、産業界の受け入れ態勢など多くの課題があります。

なにより、グローバル化をめぐる大学の差別化、英語ができる学生と、できない学生の 2 極化が懸念されます。少子化が続く中で、入試の多様化による学生間の学力差や、中間層の学生の英語力を伸ばす方策も考えなければならないでしょう。

こうした状況を踏まえながら、本学のグローバル化をどのように進めていくべきか。「日本にない大学」ならではの冷静な戦略をさらに練り上げていきたいと考えています。

The International Relations and Globalization Strategy of KUT

Shinichiro Sakikawa*

(Received: May 7th, 2015)

International Relations Center, Kochi University of Technology
185 Tosayamadacho-Miyanokuchi, Kami, Kochi, 782-8502, JAPAN

* E-mail: sakikawa.shinichiro@kochi-tech.ac.jp

Abstract: Kochi University of Technology (KUT) has been increasing its presence among Japanese universities due to its research achievements and cultivation of human resources by promoting the university's approach of 'Making KUT a world class university through the pursuit of unique excellence'. Strengthening international relations with foreign universities and institutions in academic fields is the pillar of the globalization strategy of KUT. Our special Scholarship Program (SSP), started in 2003, promotes research excellence by inviting high potential doctoral students from around the world. The SSP program continues to make dynamic contributions in various fields. In addition, we have been working numerous ways to promote international exchange that defines the uniqueness of KUT. To this end, International Symposium on Frontier Technology (ISFT), Society for Social Management Systems (SSMS), Innovation Forum at Anhui University, Thailand-Singapore Study Tour, International Internship, YOSAKOI Summer School, John Manjiro Program, and the construction of International House contribute to establish an ideal environment for students. Fully committed to the recent worldwide trend of globalization of universities, the International Relations Center (IRC) at KUT formulated the four basic guidelines in the fields of Research, Education, Contribution to the local community, and Globalization on Campus.